

ダイビングトラブル集

2007.9

【ダイビングスキル編】

・耳抜き失敗

(場所) 2004年6月 和歌山県南部

(原因)

2日目の朝起きた時に4人部屋の冷房設定が25～6度で自分の身体には少し低いことが分かりましたが余り気にしなかった。(1人の場合は部屋が28度になるように設定する)

海外であれば毎朝1回、毎晩1回は必ずしている鼻の噴霧器を油断してしなかった。

1本目のダイブで耳が抜けたため、その後余り気にしていなかった。

1本目のダイブ終了後の休憩中に鼻が少し詰まっていることに気付き部屋まで戻って噴霧器をすることを考えていましたが、4階の部屋まで昇るのが面倒で、1本目のダイブで耳が抜けたため2回目も大丈夫と判断しました。

2本目のバックロールエントリー直前、間違っで一瞬鼻から空気を吸いこみマスクをしていたので耳が陰圧状態のまま海に入ってしまった。

左耳はすぐ抜けましたが、右耳が左と比べるといつも後で抜けるので、その内抜けるだろうと思い潜行しましたが、抜けないため右を上にして浮上し、何回も潜行、浮上をトライしましたが結局ダメでした。

ボートへ戻ってエキジットした後、5分ぐらいで右耳が抜けましたが、後から1人で海底地形を知らないポイントを40mまで追いかけるとトラブルの原因になるので諦めました。

3日後、風邪を引いていることが分かりました。原因は水温23.5度で4mmウェットスーツではかなり寒かったです。

(反省)

どんな海でも噴霧器は毎朝1回、毎晩1回は必ずすること。

初心に戻ってエントリー直前にボートの上で事前の耳抜きをすること。

今までダイビングの目的は水中撮影で、今回の目的は撮影でなくリブリーザーの自主トレーニングでしたが、リブリーザー用ナイトロックスが規定外でしたので法律上、現地で充填出来なくなり撮影もないので、2日目のダイビングが無目的になってしまいました。

1984年に初めてダイビングした時の本来の楽しみを忘れていました。

初心に帰って考えようと思いました。

・水面でウエイトベルト落下

(場所) 2004年8月 小笠原諸島父島

(原因)

ベイルアウト器材でエントリーし、水面でいつものようにガイドから撮影器材を受け取った時、若干上向きになったので腹筋に力が入りウエイトベルトが身体から外れて落ちました。エキジット後、ベルトのバックルを調べると使い過ぎによりバックルが磨耗して甘くなっていました。ダイビング中にベルトが外れるとドロップオフの場合、海底の石を探し

てB Cに入れることが不可能になり、重大な身体トラブルに発展する場合があります。ベイルアウト器材では何とか身体トラブルにならないように水面まで浮上できる自信はありますが、リブリーザーは循環型器材のため吸気バッグと排気バッグが浮上時にかなり膨張し対処が難しくなります。

リブリーザーのゴールデンルールでは緊急時にはベイルアウト器材に切替えて速やかに浮上することになっています。しかし、切替えが出来ても吸気バッグと排気バッグのガスを完全に抜かないと吹き上げ現象になり危険です。この作業はかなり熟練を要しますので、危機管理をしてこれ以降のダイビングはショップのレンタルベルトを使用しました。このベルトが非常に良かったので、後日売って戴きました。バックルが非常にしっかりしていて、ベルトが黄色で水面からでも簡単に探すことができます。今回のトラブルは水深10mぐらいでしたが、黒色のベルトは水面から探すのは非常に難しいです。

【水中撮影編】

・ レンズの前にエアーの泡がついていた

(場所) 1994年5月 オーストラリア エクスマス

(原因)

ジンベエザメを初めて水中で見た時、興奮して自分が出したエアーの泡が水中ハウジングのレンズに付いているのに気が付かず撮影していた。帰国後、編集時に気が付いたが後の祭でした。

(反省)

エントリー直後は泡がレンズの前に付いていないかすぐに確認する。また珍しい生物を撮影した時は、エキジット後に必ず再生して撮影内容を確認した方が良い。

【陸上撮影編】

・ ボートからの撮影で手ぶれ

(場所) 2000年8月 コスタリカ カニョ・ネグロ

(原因)

カメラ三脚の一脚または二脚を使用しなかった。

一脚または二脚を使用しなかったので、手ぶれが多かった。

只、ボートのエンジンの振動が三脚に伝わって使用できなかったかも知れないが、トライしなかったことを反省しています。

・ クルーズ船のエンジン振動による細かいブレ

(場所) 2006年1月 メキシコ ソコロ諸島クルーズ

(原因)

表層がユニークな形で有名なサン・ベネディクト島を移動中の1階船尾から三脚を使用して撮影したが、帰国後のテープ分析で島のズームアップをした時に、エンジン振動による細かいブレがあることが分かった。船上のゴムマットと三脚のゴムを使用していても細かいブレがビデオに伝わるのが分かり、手ぶれ防止機能を使用しなかったことを反省しています。

・ デジタルカメラのズームミス

(場所) 2000年8月 コスタリカ モンテベルデ

(原因)

手塚治の漫画『火の鳥』のモデルになったケツァールが20m以上の樹幹にいたため、テレコンバージョンレンズを使用し、デジタルズーム目一杯の40倍で撮影したが、日本へ帰ってからテープ分析時に画像がクリアーに撮影出来ていないことが分かった。

撮影中に真横で現地のガイドが倍率40の双眼鏡を使用してクリアーな画面を見せて戴いたのに、デジタルカメラのズームを目一杯使用して画像が壊れかけてピントが少しボケているのに気が付かなかったことを反省しています。

出発前に陸専用ビデオカメラのズームを10倍から20倍に戻した後にテレコンバージョンレンズを付けてテストをしていなかったことを反省しています。

(場所) 2003年1月 ガラパゴス フロレアナ島

(原因)

オオフラミンゴの撮影で水面がキラキラ輝いてるのに気が付かず、そのまま撮影し帰国して再生してみると、水面のキラキラの影響でカメラのピントが合わず、ほとんどの映像がピンボケになっていた。編集に使用できたのは撮影した15分の内、たったの15秒ほどでした。

ファインダーのモノクロの小さい映像では気が付かずに撮影し大変残念でした。

(視力低下を痛切に感じました。次回からは必ず眼鏡を使用します)

【海洋生物編】

・ ガンガゼに刺された

(場所) 2000年8月 コスタリカ ココ島湾内

(原因)

エントリー後、ビデオのセッティングをしながら潜行して、海底の岩に到着した時、とっさに手が岩に着き、そこにガンガゼの大群がいたため、手のひらをかなり深く刺された。

(反省)

手や足を付く場所を前もって確認してから、岩や海底に手や足を付くこと。突き刺される深さにもよるが飛び上がるほど痛い。刺されたらすぐに酢で洗う。

【ナイトダイビング編】

・ クラゲの大群に刺された

(場所) 1991年8月 カリブ海英国領 ケイマンブラック島

(原因)

ビデオライトをエキジットするボートのハシゴに向けて水面に上がった時、昼間のような明るさのある強力なライトのためクラゲが大群で集まり、顔や手をたくさん刺された。エキジットで水面近くへ戻ってきた時に、ビデオライトはエキジットするハシゴに向けず、あさっての方向に照らし、そっちへクラゲを集めておいてから素早くエキジットする。刺されたらすぐに酢で洗う。

・シロガヤが首にあたった

(場所) 1993年8月 マレーシア ラヤンラヤン島ラグーン内

(原因)

ナイトダイビングでアオブダイの膜貼りをアップで撮影するため、接近したところ、シロガヤが首にあたって身体中に電気が走り、あまりの痛さに水中で飛びあがった。

夜間撮影ではシロガヤ、クロガヤ等のガヤ類の多いポイントに充分注意する。

首筋に当たると飛び上がるほど身体に電気が走り、後で腫れが残る。

(反省)

このトラブルを防ぐコツは、昼間ダイビングしている時に生息している生物を充分確認しておくこと。

【身体編】

・右足人差し指を骨折

(場所) 2006年1月 メキシコ ソコロ諸島クルーズ

(原因)

ダイビング最終日の昼の休憩中にマンタが1匹、クルーズ船の水面近くに寄ってきたので、イタリア人ダイバーが水面のマンタを追っかけまわし、船の周りをグルグル回り始めた。そのマンタを2階デッキからビデオ撮影するため、マンタに合わせて2階デッキをグルグル回っている時に右足の親指と人差し指の間に2階デッキの手すり柱(通常はボックスなのにこの船はむき出しの鉄板)が入って、右足人差し指を骨折した。

ダイビングは最終日で問題なかったが、その後、陸の観光で世界遺産2ヶ所(エルタヒン、テオティワカン)はビックコを引きながら何時間も撮影し、約1週間後に日本へ帰って来た。

・指の先を切った

(場所) 2000年8月 コスタリカ ココ島クルーズ

(原因)

首都サンホセのホテルへ到着し、チェックインする際にウエストバッグからパスポートを出そうと手を入れた時、SONY語学会話機の辞典フロップィの金具で指の先を切った。クルーズ中に完治せずダイビングの準備、水中撮影等に影響した。

(対策)

金具の端がシャープになっているので、フロップィ類は必ずケースに入れる。

・ダイビング直前は赤色系のジュース、アイスクャンディ等を食べない方が良い。

(場所) 1994年4月 西オーストラリア エクスマス

(原因)

ジンベエザメを水中撮影した後、気分が悪くなって、ゲロ禁止の船のトイレでゲロをした。ジンベエザメの撮影は初めてだったので興奮していたため、してはいけない急浮上、急潜行を繰り返していた。

真っ赤なゲロが出たため、身体がおかしくなったと思い1日中原因を考えて悩んでいた。そして早朝のダイビング前にショップのオーナーから真っ赤なアイスクャンディを貰

ったことを夜になって思い出し、ゲロをした時に身体のトラブルと勘違いすることがあると分かった。

・ 下唇を異常に日焼けした

(場所) 1999年7月 ポルトガル領アゾレス諸島ピコ島

(原因)

6日間の内、海に出たのは4日間で10時から16時までの6時間、マッコウクジラを水中撮影するため炎天下をゾディアック(船外機付ゴムボート:屋根がない)で大海原を走り回って探した。帽子をかぶっていたが太陽を避けるものが無かったため、下唇が異常に腫れあがり完治するのに1週間かかった。

【ダイビング器材編】

なし

【撮影器材編】

・ ビデオカメラの水没

(場所) 1988年8月 小笠原諸島

(原因)

到着した夜の夕食後、仲間と酒を飲みながらビデオカメラを入れる水中ハウジングのオーリングにグリースを塗っていた。翌日の初日1本目のエントリー直後、ハウジングの中を見ると水が入っているのに気付いてすぐにエキジットしたが、ハウジングの中からコップ1杯ほどの海水が出てきた。ハウジングは修理できたがビデオカメラが故障した。

(反省) これ以降、酒を飲みながら撮影器材の準備は禁止した。

【エマージェンシーグッズ編】

・ 防水用無線機の故障

カレントの強い場所で流された時にダイバーが電源ONにすると、発信された信号が船にキャッチされ、船からボートに無線機で位置を連絡する。

ガラパゴスのSKY・DANCERには常備されていたが、ココ島のSEA・HUNTERには無かった。

(場所) 2003年1月 ガラパゴス諸島ウルフ島

(原因)

電源をONにして待っているとボートが迎えに来たが、ランプが点灯していなかったため、偶然ボートが近くに來ただけでラッキーでした。

(対策)

電源をONにしてもランプが点灯しているか確認が必要です。

【携行薬品編】

(液状絆創膏)

・ サンゴのガレキでこけて傷だらけになった

(場所) 1993年8月 マレーシア ラヤンラヤン島

(原因)

ダイビング後、重い撮影器材を持って部屋へ戻る時、サンゴのガレキの上を歩いていてバランスを崩し、背中や手などが傷だらけになった。

血がなかなか止まらず安全なサメでも刺激すると良くないため非常に役に立った。

少しの傷でも水中では血がたくさん流れ出ているように見える。

水中で血を流すとサメが興奮するため、ダイビングができなくなる。

傷口を消毒しながら完全に塞ぎ、血を止めるのに役に立つ優れもの。

切り傷時の水洗いや風呂、指のさかむけ、深爪等にも使え日常でも結構役に立つ。

お勧め商品は『コロスキン』。

【乗り物編】

・飛行機の墜落

(場所) 2000年8月 コスタリカ フォルツーナ

(原因)

現地(コスタリカ)8/26(日本時間8/27)サンホセ発タマリンド行きサンサ航空の国内線小型飛行機が、途中のフォルツーナを飛び立った約10分後、コスタリカで最もアクティブなアレナル火山(1640m)の頂上から下、約200mの場所に激突し乗客8名パイロット2名の10名全員が死亡した。フォルツーナで降りたのは私1人だけでした。翌日の新聞には私の写真が大見出しで掲載され、狭い国で一躍有名になり、どこへ行ってもその話でした。8/27は私の誕生日でコスタリカの新聞には『生まれ変わった人』として報道された。墜落は撮影していませんが、フォルツーナでの着陸、離陸の一部始終をビデオに撮影していたのでテープを現地でコピーし、航空会社へ提供したところ、翌日のテレビにすべてがオンエアされた。無くなられた10名の冥福をお祈りすると共に無事に生きて帰れたことを感謝しています。

・チャーター飛行機のUターン

(場所) 1988年4月 インドネシア バンダネイラ

(原因)

元国際線スチュワーデスの某旅行会社社長と商品化されていない海の開発ダイビングに参加した。セラム島アンボンからバンダネイラまで定期便の船が20時間以上かかるため飛行機をチャーターした。バンダネイラ上空近くまで来た時、雲が多く有視界飛行のためアンボンに引き返した。後で社長に聞いたところ実際は着陸できたそうですが、本当の理由はパイロットへの賄賂が少なかったのが原因でした。

昔のインドネシアは賄賂が横行していた国で、国際線搭乗手続きのオーバーウエイトも係員に賄賂を渡せばかなり安くなった。

・ターンテーブルから荷物が出てこない

(場所) 1989年8月 インドネシア フローレス島

(原因)

空港のターンテーブルで機内預けの荷物を待っていたが出てこなかったのも、係員に聞く

と飛行機の荷物重量制限オーバーで、まだ出発した空港にあり明日の便で到着することが分かった。旅行を手配した社長とフローレス島で合流して荷物のトラブルの話しをすると、過去に重量制限を無視して空港の係員が賄賂欲しさに無理やり荷物を乗せて墜落したことがあり、賠償金の少ない開発途上国の国内線では無茶なことを云わない方が自分の身のためには良いことが分かった。

・機内預け荷物重量オーバー

(場所) 2002年12月 ガラパゴス

(原因)

米国方面の飛行機の機内預けは1人1個あたり30kgの荷物2個までチャージが無料ですが、いつも海外旅行で使用している旅行会社社長(元HIS大阪マネージャー)より1個32kgまでは問題ないと云われた。関空のカウンターで30kgにして下さいと云われ何度も交渉したがダメでした。今まで約15年間20回以上、海外旅行をしてきましたが、こんなに頑固に規則どおりに云われたのは初めてでした。仕方なく2個から2kgずつ荷物を抜いたが、それが手荷物検査で引っかかった。中に水中ハウジングの組立て用の特殊ドライバー数本が入っていたが、危険物扱いになり小さなダンボール箱に入れられアメリカ経由でエクアドルのキトまで航空会社の社員が持参すると云われた。このドライバーが無くなると旅行の最大目的の水中撮影ができなくなるため、関空の手荷物検査係員に、もし紛失した場合は水中撮影ができなくなるため、旅行代金120万円の賠償請求を航空会社へ請求しますと云うと、上司に相談しアメリカでターンテーブルに出てくるので受取って下さいと急に変更された。トランジットのヒューストンで出て来なかったのも、日本人係員に事情を説明して探してもらったら、危険物のためセキュリティ担当がエクアドル行きの飛行機のパイロットに直接手渡したことが分かった。本当に手渡したのか不安でキトに着くまで寝れなかった。キトに着いて探したが見つからず、現地地上係員を呼んで探してもらい30分後にやっと出てきた。

【食事編】

・食あたり

(場所) 1992年8月 マレーシア クアラルンプール

(原因)

シパダンにてダイビング後、首都クアラルンプールで1泊した時、バイキングスタイルのディナーで大きな生ガキが出てきた。ファイブスターでクアラルンプールNO.1のホテルだったが、少し不安があったのでチーフコックを呼び酢を注文しようとしたところ酢の英語が思い出せず、化学記号の CH_3COOH と云うと益々混乱してきたので、結局レモンで殺菌できると思いこんで使用することになった。帰国日の翌日の午後、ホットココアを飲んだ直後、お腹の具合が悪くなり、その日から1週間出張先で下痢が止まらなかった。

【その他編】

・日本円がただの紙くずだった

(場所) 2000年8月 コスタリカ ココ島クルーズ

(原因)

事前に『地球の歩き方』を読んでいたが、通貨両替のページを読み間違った。

日本円以外に現金を持っていなかったため、クルーズ船出発日の朝一番に慌ててサンホセの銀行へ行き、現地の慣れない現金引出し機から、やっとの思いでカードで現地通貨を引き出すことが出来た。

コスタリカ国内では空港もホテルも日本円は両替不可で、首都サンホセに金利の高い民間両替所が1件あるだけです。中南米のほとんどの国では日本円はただの紙くずに過ぎないため、両替には充分注意が必要です。

・朝寝坊

(場所) 2000年8月 コスタリカ プラヤ・オスティオナル

(原因)

早朝4時に起きられず5時に起きていったので、ヒメウミガメが数十頭しかいなく、壮大なアリバダ現象(ヒメウミガメ数十万頭が現れる現象で、1日単位では数百頭が見れる)が撮影できませんでした。

只、『下弦の日』を挟んで前後1週間の最後の日だったので、4時に起きても数百頭を見ることは出来なかったかも知れませんが、起きられなかったことを反省しています。

以上
浜谷 優